

高校生の体型の年代変化と衣服寸法

静岡県における1991年の調査結果と1967年、1978年資料との比較

Contemporary Changes in Body Measurements and Clothing Size of Senior High School Students A Comparison of Body Measurements Taken in 1967, 1978 and 1991 in Shizuoka Prefecture, Japan

大村 知子・渡邊 敬子*
Tomoko OMURA Keiko WATANABE*

（平成5年10月12日受理）

緒言

人間は被服によって提供される環境下でその一生のほとんどを過ごすのであるから、当然その快適性はあらゆる角度からの研究が必要である。今日では大量生産や自動縫製化など被服の生産は工業化されているので、不特定多数の人体に適合する被服を設計するという意味からも着衣基体としての人体の形態についての研究が重要である。

わが国においても、横断的な体型観察の研究はかなり充実してきた^{9)~10)}が、近年、被服設計の立場から身体計測調査を実施した報告は少なく、特に成長期の報告はほとんど見あたらない。著者らはさきに、大学生について1990年に身体計測調査を行い、1978年の工業技術院体格調査静岡地区の大村らの資料との比較からプロポーション等の年代差が生じていることを明らかにした¹⁰⁾。そこで今回は、これと近接する年齢層の高校生の約25年間の体型の年代変化を明らかにし、現在の高校生の体格・体型に適合する被服の設計に寄与することを目的として考察を試みた。また、この年齢層の体型に関して、被服設計の視点から、20年以上の長期間を隔て、多項目についての研究調査例はみあたらない。したがって、本研究がほぼ同一条件によって約25年間に3回にわたる計測調査資料を蓄積したことについても、今後の体型研究に寄与する意義は大きいと考える。

方法ならびに資料

調査は静岡県立某高等学校に在籍する1年から3年の男女376名を対象に、1991年11月から翌年2月にかけて実施した。身体計測は工技院体格調査方法に準じ、男子52項目、女子54項目について実施した。比較資料は、1967年と1978年に今回と同一の対象校において実施された工業技術院体格調査の静岡地区の計測記録原票のうちの16歳から18歳まで（それぞれ年齢±6ヶ月）の男女を用いた。いずれもローレル指数1.6以上の者を肥満と見なして解析から除外した。

* 大妻女子大学大学院家政学研究科博士課程被服環境学専攻 東京都千代田区三番町 12

研究資料の人数構成は表1の通りである。

全国値と比較した結果、それぞれの集団の体格はその時期のほぼ一般的体格をもつ集団であるといえるが、今回の16歳女子は身長がやや高く、1967年の16歳男子と1978年の18歳女子は体重が全国値を下回っていた。また、女子の初潮年齢は12歳6ヶ月であった。1978年資料の調査資料でもほぼ同じ12歳6ヶ月、1967年の調査資料では12歳10ヶ月であった。

表1 資料の人数構成 (人)

年齢	男子			女子		
	1967年	1978年	1991年	1967年	1978年	1991年
	16歳	51	85	52	45	78
17歳	51	76	56	56	67	71
18歳	54	63	65	51	61	50

今回解析に用いた項目は衣服寸法に関わりが深いと考えられる男女各19項目と身体比例値(対身長比)14項目である。すなわち、身長・後胴高・下肢長・股の高さ・背丈・袖丈・背肩幅・頸付根囲・乳頭位胸囲・下胴囲(女子は胴囲)・腰囲・上腕最大囲・大腿最大囲・体重の計14項目とこれらの項目(体重を除く)の身長に対する比例値12項目である。年代間の差の検定にはt検定を用いた。

等身長階級群を対象とした比較については、16から18歳の全資料を一括した身長の平均値と標準偏差に基づいて $M \pm 1\sigma$ の範囲に属する者を抽出して比較を試みた。

結果および考察

1 1991年資料と1967年資料との比較

男女別・年代別・年齢別の各グループの基本統計量は表2、表3、表4に示す通りである。

表5には1967年資料と1978年資料、1978年資料と1991年資料、1967年資料と1991年資料との間の年代差の検定結果を示す。これらの表からまず約25年間を隔てた1967年資料と1991年資料の成績とを比較してみると、身体全体が大きくなっていることが分かる。例えば身長ではいずれの年齢でも1991年資料が1967年資料を2cm以上も上回っており、特に16歳と18歳では男女とも統計的に有意な差が認められた。下肢長もまた1991年資料が1967年資料を2cm前後上回っている。特に男子では身長の増加が下肢長の増加とほぼ等しく、この25年間の身長の増加は下肢長の増加によるといえる。

さらに、後胴高、袖丈、周径項目(男子の乳頭位胸囲を除く)、体重においてもほぼ男女のいずれの年齢とも1991年資料の成績が1967年資料の成績を統計的に有意に上回っている。このように身体が大型化するなかで男女の背丈と女子の背肩幅のみが減少傾向を示している。上半身にまとう衣服の大半は頸部から肩部の骨格によってその重みが支えられるため、ある衣服がこの部位の形態にあってはるか否かによって体を感じる重みや生理的負担は異なることが知

表2 16歳男女の成績

項目	男 子						女 子					
	1967年(N:51)		1978年(N:85)		1991年(N:52)		1967年(N:45)		1978年(N:78)		1991年(N:50)	
	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.
身長	165.94 ^{cm}	4.95 ^{cm}	167.59 ^{cm}	5.31 ^{cm}	168.23 ^{cm}	5.71 ^{cm}	154.10 ^{cm}	4.96 ^{cm}	156.91 ^{cm}	4.39 ^{cm}	157.42 ^{cm}	5.45 ^{cm}
後 胸 高	96.24	3.52	99.81	3.90	99.59	4.33	94.71	3.75	96.45	3.63	96.81	3.99
股 の 高 さ	74.69	2.88	75.34	3.52	77.12	3.28	68.30	3.47	70.75	2.86	71.12	3.13
下 肢 長	86.73	3.38	87.78	3.90	88.73	4.26	80.39	3.58	81.78	3.30	82.21	3.37
背 丈	45.99	2.30	44.56	2.46	44.33	1.92	37.95	1.69	37.84	1.62	37.53	1.92
右 袖 丈	53.22	2.15	54.10	2.41	55.78	2.53	49.82	1.97	50.81	2.14	51.66	2.39
背 肩 幅	42.98	1.83	42.87	2.02	42.80	2.60	40.00	1.68	38.35	1.80	38.64	1.60
頸 付 根 囲	38.39	1.42	39.24	1.73	40.31	1.82	34.59	1.34	34.95	1.44	36.18	1.38
乳 頭 位 胸 囲	83.75	3.63	82.53	3.97	84.06	5.51	80.45	3.35	80.87	5.03	82.27	3.88
胸 囲 ^{注)}	66.44	3.33	68.51	5.07	72.29	5.01	59.65	3.45	60.77	3.81	63.42	3.19
腰 囲 a	85.10	3.28	86.83	4.23	91.49	5.68	88.15	4.16	87.06	4.10	90.61	4.13
右上腕最大囲	24.69	1.49	25.98	2.33	27.02	2.61	24.15	2.01	25.18	1.59	25.64	1.70
右大腿最大囲	48.82	2.58	50.33	3.65	53.79	4.57	50.76	3.22	51.75	3.49	53.98	3.19
体 重	53.56 ^{kg}	4.84 ^{kg}	57.31 ^{kg}	6.77 ^{kg}	59.80 ^{kg}	8.17 ^{kg}	48.22 ^{kg}	5.43 ^{kg}	50.44 ^{kg}	5.88 ^{kg}	51.55 ^{kg}	5.29 ^{kg}

注) 男子は下胸囲

表3 17歳男女の成績

項目	男 子						女 子					
	1967年(N:51)		1978年(N:76)		1991年(N:56)		1967年(N:56)		1978年(N:67)		1991年(N:71)	
	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.
身長	165.06 ^{cm}	5.79 ^{cm}	168.97 ^{cm}	5.72 ^{cm}	167.05 ^{cm}	5.45 ^{cm}	156.35 ^{cm}	5.04 ^{cm}	157.05 ^{cm}	4.42 ^{cm}	157.75 ^{cm}	5.41 ^{cm}
後 胸 高	95.55	3.98	100.18	4.60	99.25	4.49	96.21	3.41	96.50	3.52	97.79	3.79
股 の 高 さ	74.16	3.58	75.85	4.02	75.66	4.25	69.53	3.12	70.63	3.40	71.65	3.71
下 肢 長	85.89	4.00	89.03	4.33	87.83	4.16	81.44	3.02	81.65	3.53	82.57	4.11
背 丈	45.91	2.15	45.57	2.27	43.77	2.38	38.46	2.12	38.08	2.01	36.57	2.12
右 袖 丈	53.05	2.43	54.70	2.77	54.93	2.73	50.11	2.15	50.81	2.09	51.75	2.45
背 肩 幅	43.54	2.30	43.53	2.07	43.27	2.57	39.98	2.12	39.04	1.42	37.90	1.78
頸 付 根 囲	38.70	1.60	39.33	1.54	41.00	2.28	34.96	1.37	35.49	1.02	37.00	1.69
乳 頭 位 胸 囲	84.95	3.26	83.22	4.10	84.72	4.54	81.32	4.47	80.82	4.02	83.07	4.29
胸 囲 ^{注)}	66.47	3.51	69.04	5.13	71.29	4.69	60.26	3.21	60.31	3.31	64.94	3.94
腰 囲 a	85.81	3.51	86.97	4.53	91.09	4.31	89.15	3.95	87.25	3.73	91.74	4.68
右上腕最大囲	25.22	1.57	26.21	2.54	26.65	2.06	24.36	1.80	25.14	1.58	26.27	2.05
右大腿最大囲	48.96	2.62	50.19	3.75	53.63	4.04	51.30	3.24	51.33	3.08	53.98	3.36
体 重	53.66 ^{kg}	5.12 ^{kg}	57.93 ^{kg}	6.95 ^{kg}	58.42 ^{kg}	6.69 ^{kg}	49.94 ^{kg}	5.37 ^{kg}	50.37 ^{kg}	5.02 ^{kg}	51.51 ^{kg}	5.42 ^{kg}

注) 男子は下胸囲

表4 18歳男女の成績

項目	男 子						女 子					
	1967年(N:54)		1978年(N:63)		1991年(N:65)		1967年(N:51)		1978年(N:61)		1991年(N:50)	
	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.
身長	167.30 ^{cm}	5.73 ^{cm}	167.77 ^{cm}	5.83 ^{cm}	170.22 ^{cm}	6.04 ^{cm}	154.41 ^{cm}	4.40 ^{cm}	156.79 ^{cm}	5.19 ^{cm}	157.03 ^{cm}	4.72 ^{cm}
後 胸 高	97.45	3.92	99.05	4.26	101.73	4.70	94.55	3.50	96.29	4.19	96.99	3.59
股 の 高 さ	75.83	3.68	74.60	3.82	77.23	4.24	68.03	3.35	71.03	3.05	70.38	3.53
下 肢 長	87.76	4.01	88.02	4.10	89.47	4.24	80.46	3.51	81.77	3.62	81.65	3.36
背 丈	46.27	2.49	45.71	2.20	44.45	2.45	37.74	1.56	38.19	1.70	36.47	1.86
右 袖 丈	53.55	2.45	54.53	2.50	56.65	2.62	49.73	2.18	50.77	2.20	51.42	2.23
背 肩 幅	44.12	2.62	43.59	1.73	44.45	2.45	40.37	1.72	38.34	1.58	38.29	1.75
頸 付 根 囲	39.51	1.39	40.05	1.53	41.73	2.19	35.25	1.18	34.99	1.30	37.12	1.47
乳 頭 位 胸 囲	86.28	4.01	85.42	4.09	85.78	4.89	81.38	4.17	80.02	3.91	83.59	3.63
胸 囲 ^(注)	67.68	3.92	71.44	5.12	72.53	5.84	60.00	2.87	59.77	2.93	64.46	2.98
腰 囲 a	86.97	3.14	88.35	4.16	92.13	5.17	88.64	3.26	86.01	3.33	92.19	3.48
右上腕最大囲	25.61	1.77	27.08	2.17	27.72	2.44	24.22	1.64	24.67	1.41	25.97	1.59
右大腿最大囲	49.50	2.67	51.69	3.49	54.27	3.92	50.95	3.15	50.99	2.35	54.59	3.03
体 重	56.16 ^{kg}	6.05 ^{kg}	60.09 ^{kg}	7.04 ^{kg}	61.21 ^{kg}	7.72 ^{kg}	49.08 ^{kg}	4.89 ^{kg}	49.27 ^{kg}	4.11 ^{kg}	51.97 ^{kg}	4.79 ^{kg}

注) 男子は下胸囲

表5 男女の年齢別年代差の検定結果

項目	年齢 年代 性別	16歳						17歳						18歳					
		'67:'78		'78:'91		'67:'91		'67:'78		'78:'91		'67:'91		'67:'78		'78:'91		'67:'91	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
身長		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
後 胸 高		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
股 の 高 さ		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
下 肢 長		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
背 丈		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
右 袖 丈		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
背 肩 幅		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
頸 付 根 囲		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
乳 頭 位 胸 囲		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
胸 囲 ^(注)		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
腰 囲 a		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
右上腕最大囲		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
右大腿最大囲		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
体 重		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

*; 5%水準で有意差あり

注) 男子は下胸囲

られている。そこで、被服の設計の立場からは女子の背肩幅が減少していることは非常に重要な変化であり、特にこれを考慮した設計が必要であるといえる。

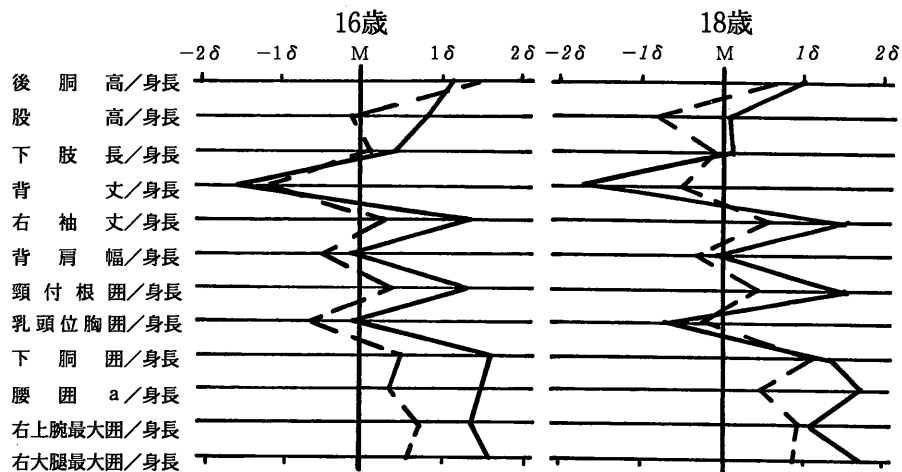
このような身体寸法の変化をプロポーションという視点から検討する目的で、それぞれの成績の身長に対する割合を求めた。図1、図2は16歳と18歳の男女のプロポーションの変化を1967年資料の身体比例値を基準線としてモリソンの関係偏差折線で示した図である。

男女とも16歳、17歳、18歳の3年齢群いずれも後胴高/身長で1991年資料が1967年資料を上回り、逆に背丈/身長の比は下回っている。すなわち、ウエストラインの位置が高くなっているといえる。特に男子ではこの傾向が顕著である。また、袖丈/身長は男女とも1991年資料が1967年資料を有意に上回り、身長に対して腕の長さの割合の大きい体型に移行しているといえる。女子では、1991年資料の背肩幅の比が1967年資料を有意に下回っている。また、男子の乳頭位胸囲を除く周径の比は1991年資料が1967年資料を有意に上回っている。周径の比が大きくなったなかで、乳頭位胸囲の比にがほとんど変化していないことや背肩幅/身長の傾向を考え併せると、男子はいわゆる逆三角形のプロポーションから全体に太くずんどうのプロポーションに移行したといえる。1991年の女子もまた胴囲/身長の関係偏差値が乳頭位胸囲/身長や腰囲/身長を上回ることからずんどうのプロポーションに移行しているといえる。

2 1991年資料と1978年資料との比較

1991年資料の成績を1978年資料の成績と比較した場合、身長には顕著な差は見られなかった。明治以来第2次世界大戦中を除き、日本人の身長はほぼ一定の伸びを保ってきたことが知られている¹⁰⁾。しかし、この高身長化現象が終息期を迎えたという木村の説があり¹⁰⁾、今回はこれを裏付ける結果を得たといえる。

一方、高身長化は見られなくなったものの、体型には年代差が生じていることが明らかになっ



基準線：1967年，——— 1978年，————— 1991年，

図1 モリソンの関係偏差折線による男子の対身長比の年代比較

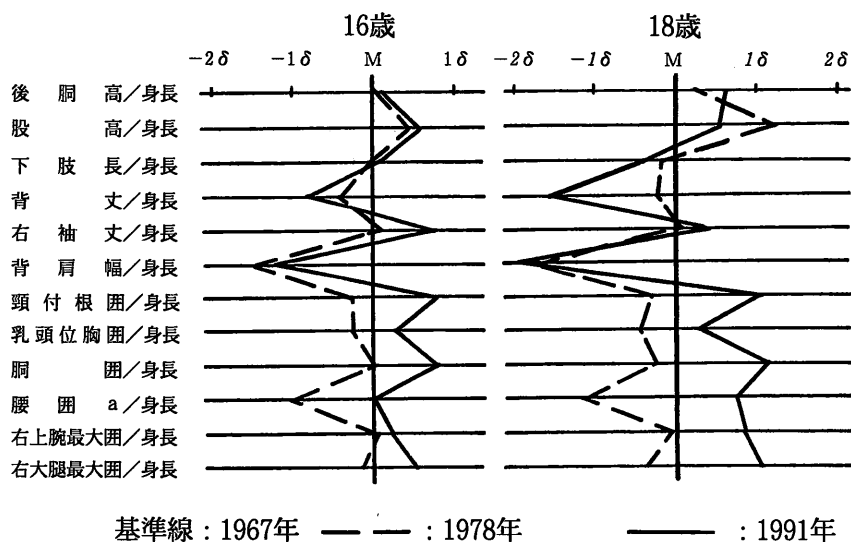


図2 モリソンの関係偏差折線による女子の対身長比の年代変化

た。袖丈や周径項目は男女とも1991年資料の成績が1978年資料の成績を上回り、背丈は小さくなる傾向にある。また、男子においては1991年資料の股の高さが1978年資料の成績を上回っている。これらはこの間の体つきの差といえよう。

従って、着衣基体としての体型変化については、厚生省や文部省によって報告される身長、体重など数項目のデータからの変化がみられなくなったとしても、それだけで年代差が無いと判断せず、プロポーション等の変化を明らかにして、それに対応する被服設計が必要であるといえる。

3 等身長階級群の体型の比較

先に述べたように体型には明らかな年代差が認められた。加藤ら¹⁰⁾は身長と高径項目の対身長比の相関について指摘し、等身長階級群の体型を比較している。今回資料においてもいくつかの項目間に低い相関関係が認められた。そこで、身長に年代差が生じたという要因を排除するために、一定の範囲の体格に属する者を抜き出して年代比較を試みた。すなわち、男女別に全体の身長の平均値と標準偏差を求め、平均値 $\pm 1\sigma$ の範囲（男子は $167.8\text{cm} \pm 5.6\text{cm}$ 、女子は $156.3\text{cm} \pm 5.0\text{cm}$ ）に属する者を抽出した。18歳男子の結果は図3に示す通りであり、1991年の男子は1967年に比べ後脛高の比が大きく、袖丈の比が大きく、乳頭位胸囲以外の周径の比の大きい体型であるなど先に述べた特徴と一致することが明らかになった。

女子の等身長階級群においても、先に述べた女子全体の傾向と一致した。18歳は1967年調査時から既に成長がほぼ完了している年齢といわれている。その18歳において身長ほぼ等しい群（等身長階級群）にたいしての今回結果と1967年結果との比較においても年代差が認められた。すなわち、平均身長が高くなったことや成長の遅延差の要因を除いてもなお、体型には25年間に顕著な年代差が生じたことが確認されたといえる。

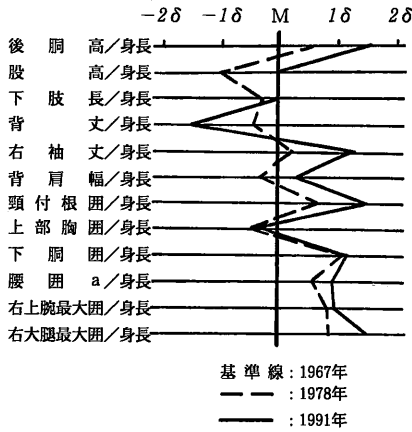


図3 モリソンの関係偏差折線による18歳男子等身長階級群の対身長比の年代比較

4. J I S規格の適合性について

既製衣料のサイズについては、J I S衣料サイズ規格が定められているが、今回の調査の結果、体型に年代差が生じていることが明らかになったので、まず2元範囲表示規格の適合性を検討した。図4、5は1991年の16歳から18歳の男女の分布図に成人用の2元範囲表示規格を重ねた図である。女子の約95%は女性用の範囲表示規格でカバーする。これは1978年の工業技術院体格調査の結果に基づいて規格が改訂され、規格の範囲も広く設定されていることなどからカバー率が高いと考えられる。これに対して男子は、成人男性用の2元範囲表示規格でのカバー率が約60%である。さらに、現行の規格では18歳まで適用させている少年用のサイズでの2元範囲表示規格の範囲内のカバー率は約50%であった。フィット性が要求されない衣服のサイズ表示に用いる最も単純な2元範囲表示規格でさえこのようにカバー率が低く、制定当初以来旧資料に基づいたまま改訂されていない男性用のサイズ規格は、岡田ら¹⁰⁾も成人男子について指摘しているように、本来の機能を十分に果たせなくなって

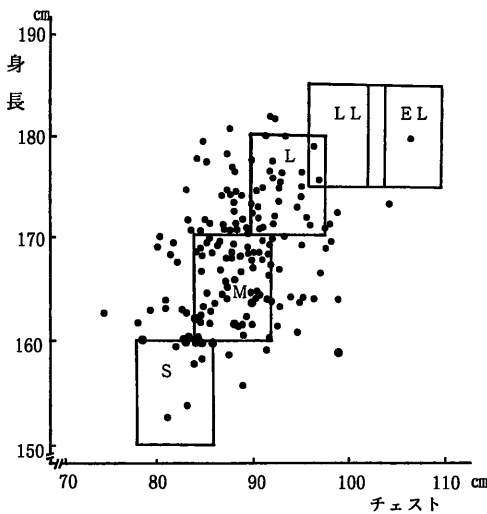


図4 1991年の16~18歳男子の身長とチェストの分布と成人男子用2元範囲表示との関係

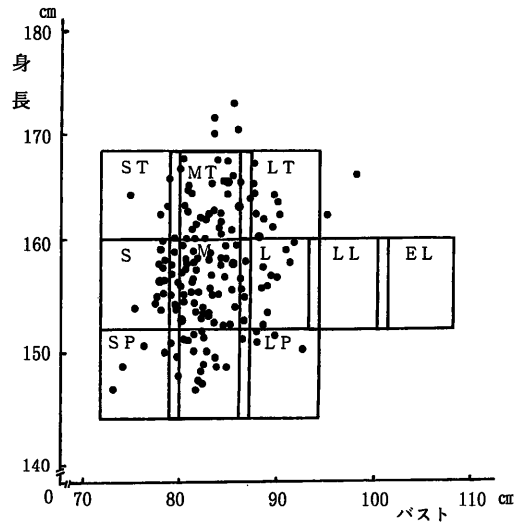


図5 1991年の16~18歳女子の身長とバスの分布と成人女子用2元範囲表示との関係

いることが明確になった。

また、男子の体型区分に用いられるドロップについて、上部胸囲ー下胴囲から各自のドロップを求めて検討した(図6)。その結果、規格の範囲外、すなわちドロップが16 cm以上ある者がおよそ半数を占めていた。これについても明らかに現状に合っていないといえる。これらの結果から、特に男性用の衣料サイズ規格は改訂が急務であるといえる。また、女子の2元範囲表示規格は高い適合率を示したが、1991年資料は1978年資料に比べ、袖丈と周径が上回る、背肩幅が下回るなど、体つきのちがいが認められたので、各号数の衣服寸法設定の参考となる各部位の寸法は最近の体型の実状に合わないなどの不都合が生じていることが考えられる。工業規格そのものが頻繁に改訂されることは、それに対応する生産者にとっても消費者にとっても好都合ばかりではない。しかし、設計の参考となる各部寸法などについては常に体型の変化に対応する新しいデータを活用して設計しなければ、利用者のニーズにも対応できない。衣料品メーカーの独自調査は不統一性などの混乱も生じ易いので、研究者や公の機関が更新のためのデータの提供や検討を行う必要がある。

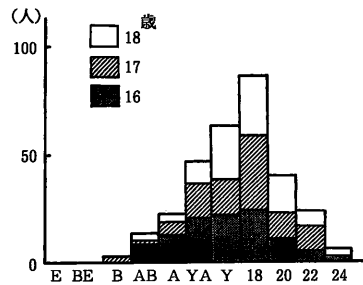
以上のように25年間における3回の調査結果の比較によって、体型には1967年から1991年の間に年代差が生じていることが明らかになった。被服設計に際してはこれらの体型の変化を踏まえることが必要がある。特に、1991年資料と1978年資料の間には身長に差がないにも関わらず、プロポーションには明らかな年代差が生じていた。このことから、着衣基体の年代変化の把握には、身長などの数項目だけではなく被服設計のための項目による体格調査を定期的に行い、最新のデータをもって被服の設計をすべきであるといえる。また、男性用JISサイズ規格のカバー率が低かったことから、サイズ規格本来の機能を果たし、体つきにフィットする被服を調達しやすくするために、早急な規格の見直しと改訂が必要である。

要約

本報は高校生の約25年間の体型の年代変化を明らかにし、現在の高校生の体格・体型に適合する被服の設計に寄与することを目的とした。

調査は静岡県立某高等学校に在籍する1年から3年の男女376名を対象に、1991年11月から翌年2月にかけて実施した。身体計測は工技院体格調査方法に準じ、52項目(女子54項目)について実施した。年代比較に用いた資料は1967年と1978年に今回と同一の対象校において実施された工技院体格調査の静岡地区の計測記録原票である。資料は年齢±6ヶ月で16歳、17歳、18歳に分類した。解析に用いた項目は衣服寸法に関わりが深いと考えられる14項目と身長に対する身体比例値12項目である。年代間の差の検定にはt検定を用いた。

結果は以下の通りである。



注) E～Yはドロップによる体型分類によった。前記非該当者は上部胸囲と下胴囲の差(ドロップ)で分類した。
18:17.1～19.0 20:19.1～21.0
22:21.1～23.0 24:23.1～25.0 (cm)

図6 1991年・16～18歳男子の体型別分布

- 1) 1991年資料のほとんどの項目の成績は約25年前の1967年資料の成績を上回り、身体全体が大きくなっているといえた。例えば身長ではいずれの年齢でも1991年資料が1967年資料を2cm以上も上回っていた。後胴高、袖丈、周径項目、体重はほぼ男女のいずれの年齢でも1991年資料の成績が1967年資料の成績を統計的に有意に上回った。
- 2) 1991年資料の身体比例値と1967年資料の身体比例値を比較すると男女ともに今回の後胴高・袖丈・周径の比(乳頭位胸囲を除く)が有意に上回る、逆に背丈と背肩幅(女子のみ)の比が有意に下回ることなどの傾向が認められた。
- 3) 1991年資料の成績を1978年資料の成績とを比較した場合、身長には顕著な差は見られなかった。いわゆる高身長化現象が終息期を迎えたと考えられる。しかし、身体比例値には明らかな年代差が認められた。
- 4) 25年間3回の成績を通してみると、男子の周径は絶対値、身体比例値ともに1967年・1978年・1991年の順に大きくなる傾向にあった。女子は1967年資料と1978年資料に差が認められず、身体比例値でみると減少する傾向にあったが、1991年資料はそれらを有意に上回った。男女とも周径の比が大きくなる傾向にあるといえた。
- 5) 身長の変化を配慮して男女別に身長の平均値 $\pm 1\sigma$ に属する者を抽出してプロポーションの年代比較をした場合にも、男女いずれにも同様の年代差が見られた。
- 6) 少年用2元範囲表示のカバー率は50%であり、成人男性用では約60%のカバー率であったので、男子も成人用衣料サイズ規格が適応されるべきである。また、ドロップが規格の範囲外(16cm以上)の者が全体の過半数を占めるなど体型の年代差が生じた結果、サイズ規格が現在の高校生男子の体型の実態に合わなくなっていることも明らかになった。

調査に際して御協力を賜りました高等学校校長 笠原健次郎先生、教務主任 角田 實教諭、学年主任 河原崎弘教諭・大河平才毅教諭・玉置允雄教諭をはじめ諸先生、学校当局の皆様、被検者の皆様に深く感謝し、心から御礼を申し上げます。

また、1967年・1978年調査の責任者であられた河村房代静岡県立大学名誉教授ならびに1978年の計測を分担された長田直子同大学助手には貴重な資料の使用を快諾して頂きましたことを深謝し、御礼を申し上げます。

1991年度計測の実施においては、本学研究生の秋山裕子教諭と被服学研究室4年生大嶽紀子さんの多大なご助力を得たことを記し、謝意を表します。

本報の一部は第43回日本家政学会大会(東京, 1993. 5. 23)において口頭発表した。

引用文献

- 1) 柳沢澄子・須貝容子・芦澤玖美: 日本人女子(4才から17才)の身体比例について, 人類誌, Vol.72, 4, pp. 163~173, (1965)
- 2) 松山容子・奥山明子・長谷部ヤエ: 日本人女子(6才から17才)の体型に関する一考察, 家政誌, Vol.18, 5, pp. 315~318, (1967)
- 3) 岡田宣子: 日本人の身体比例の年齢的変化, 人類誌, Vol.79, 2, pp 139~150, (1971)
- 4) 大橋真理子: 成長期の年齢区分—衣服設計の立場から—, 家政誌, Vol.29, 7, pp. 441~449, (1978)
- 5) 高部啓子: 着衣基体としての人体の形態類型化に関する研究(第1報)—成長期男女の身

- 体測定値の主成分分析一, 応用統計学, Vol.14, 3, pp. 95~111, (1985)
- 6) 高部啓子: 着衣基体としての人体の形態類型化に関する研究(第2報)一判別分析による人体の形態類型化一, 応用統計学, Vol.14, 3, pp.113~130,(1985)
 - 7) Hiroko Takabu・Yoko Matsuyama・Shiro Kondo and Sumiko Yanagisawa : Growth Characteristics of Contemporary Japanese, J.Anthrop. Soc. Nippon, Vol.97, 4 ,pp.457~474, (1989)
 - 8) 河村房代・大村知子・塚本桃代・長田直子: 因子分析による成長期の体型の研究(第1報)一男子の年齢的变化一, 家政誌, Vol.34,12,pp. 803~812,(1983)
 - 9) 大村知子・河村房代・塚本桃代・長田直子: 因子分析による成長期の体型の研究(第2報)一女子の年齢的变化一, 家政誌, Vol.35, 1 ,pp. 32~40,(1984)
 - 10) 河村房代・大村知子・長田直子: 多変量解析による成長期の体型の研究(第3報)一肩部・頸部の形態因子について一, 家政誌, Vol.38, 2 ,pp. 129~134,(1987)
 - 11) 大村知子・河村房代・長田直子: 多変量解析による成長期の体型の研究(第4報)一肩部・頸部の類型化一, 家政誌, Vol.38, 3 ,pp. 213~219,(1987)
 - 12) 大村知子・渡邊敬子: 大学生男女の身体寸法ならびに被服寸法に関する認識一身体計測値との比較一, 静岡大学教育学部研究報告自然科学篇, Vol.43, pp. 51~60, (1993)
 - 13) 木村邦彦: 日本人の時代的变化は終わったか, 姿勢研究, Vol. 4, 1 ,pp. 10~27,(1984)
 - 14) 河内まき子: 日本人の形質の時代変化と環境要因, 「現代の人類学1 生体人類学」東京至文堂,pp. 96~109 ,(1983)
 - 15) Kiyotaka KATO・Tadaaki YAJIMA・Makiko KOCHI・Hiroshi HOSHI: Sex Difference in Somatometry Viewed from a Compariso of Similarly Tall Men and Women, J. Anthrop. Soc. Nippon, Vol.97, 1 , pp. 81~93,(1989)
 - 16) 岡田宣子・古松弥生: 成人男子の身体形態特性を表す要因の抽出と年齢的变化, 家政誌, Vol.44, 7 , pp. 573~580,(1993)